

# 第 131 回日耳鼻長崎県地方部会

## 学術講演会 プログラム抄録集



日時：平成 21 年 12 月 13 日（日）午前 9 時 55 分～

場所：アルカス佐世保（佐世保）

### 〈ご案内〉

- ◆ 会場は、アルカス佐世保 3 階の大会議室 A, B です。  
(JR 佐世保駅より徒歩 5 分、TEL0956-42-1111)
- ◆ 専門医の方は学術集会参加報告書(平成 21 年度用)をご提出下さい。

### 〈演者の方へ〉

- ◆ 一般演題の口演時間は 7 分以内、討論は 3 分以内です。時間厳守をお願いします。スクリーンは 1 面でプレゼンテーションには Windows Power Point2007 及び 2000 を使用します。Mac 使用の方は Windows ファイルに変換して、文字ずれ・文字化けなど無いことを確認してから CD-R またはフラッシュメモリーでご持参下さい。スライド枚数に制限はありませんが、発表時間を厳守してください。

### 〈抄録原稿の書き方について〉

- ◆ 日耳鼻会報増刊号への掲載はありませんが、事務局への提出は行います。日耳鼻提出用の抄録原稿は本抄録に掲載された内容といたします。変更を希望される場合のみ、学会当日に変更抄録をご提出下さい。なお、抄録原稿の書き方については、日耳鼻会報に記載された「地方部会講演抄録原稿の提出について」をご参考ください。



★会長挨拶 (9:55~10:00)

高橋晴雄(長崎大)

第Ⅰ群：耳・鼻症例 (10:00~10:35)

座長 藤山大祐 (長崎大)

1. 外耳道異物が誘因と思われた耳性脳膿瘍の一例

○占部有人・佐藤智生・道祖尾 弦・穠山直太郎・藤山大祐・川田晃弘・隈上秀高・高橋晴雄 (長崎大)

2. 再発性多発軟骨炎の一例

○宗 謙次・渡邊 毅・岩永 哲・田中藤信 (長崎医療)  
宮下賜一郎・角川智之・中島章太 (同内科)  
伊東正博 (同病理)

3. 季節性アレルギー性鼻炎患者の内服治療、局所点鼻治療に関する患者意識調査

○高崎賢治・高橋晴雄 (長崎大)  
江夏 薫 (長崎原爆)  
江上徹也・重野浩一郎・吉見龍一郎・高村博光・道津 充 (長崎市)  
宮崎 充 (西彼長与)  
山崎恵三 (佐世保市)

第Ⅱ群：腫瘍症例 1 (10:35~11:10)

座長 石丸幸太郎 (長崎大)

4. 呼吸困難を初発症状とした再発性多発性軟骨炎の1例

○前田耕太郎・坂口功一・原 稔・陣内進也・高野 篤・石丸幸太郎・金子賢一・高橋晴雄 (長崎大)

5. 当科における口腔・咽頭癌切除面に対するPGAシートおよびフィブリン糊スプレー被覆法の経験

○渡邊 毅・宗 謙次・岩永 哲・田中藤信 (長崎医療)

6. 鼻腔神経内分泌小細胞癌の1例

○山口仁平・眞田文明・畑地憲輔 (長崎市民)  
入江準二・安倍邦子 (同病理)

第Ⅲ群：腫瘍症例 2 (11:10～11:30)

座長 安達朝幸 (佐世保総合)

7. 頭頸部腫瘍に対する Mohs 軟膏の使用経験

○北岡杏子・西 秀昭・奥 竜太・安達朝幸 (佐世保総合)  
池原 進・横山洋子・武石恵美子 (同皮膚科)

8. 家族性両側頸動脈小体腫瘍の 1 例

○岩永 哲・宗 謙次・渡邊 毅・田中藤信 (長崎医療)  
伊東正博 (同病理部)  
山口仁平 (長崎市民)  
小室 哲 (長崎市)

★同門会学術奨励賞受賞論文講演 (11:30～12:00)

司会 同門会々長 中島成人 先生

2009 年 村田明子 先生

演題名：Amplitude and area ratios of summing potential/action potential (SP/AP) in  
Meniere's disease.

★日耳鼻全国会議代表者会議報告 (12:00～12:10)

「医事問題セミナー」の報告 医事問題委員会 本川浩一

★長崎県耳鼻科病診連携研究会総会 (12:10～12:25)

進行・挨拶 青木眞二  
会計報告 高崎賢治

★長崎県地方部会事務局からの連絡 (12:25～12:30)

隈上秀高

★閉会

\*当日は地方部会終了後、同会場にて 13 時 30 分から「平成 21 年度 補聴器  
相談医講習会」を予定いたしております。

## 1. 外耳道異物が誘因と思われた耳性脳膿瘍の一例

○占部有人・佐藤智生・道祖尾 弦・穠山直太郎・藤山大祐・川田晃弘・隈上秀高・高橋晴雄（長崎大）

外耳道異物から脳膿瘍を併発した一例を経験したので報告する。症例は 32 歳男性。2008 年 5 月より右耳漏があり近医で耳処置を受けていたが、通院を自己中断した。2009 年 5 月、頭痛・めまい・右顔面神経麻痺が出現し当科を紹介された。側頭骨 CT で右外耳道・乳突腔の軟部陰影と、後頭蓋窩にガス産生を伴う脳膿瘍があり、中耳根本術、脳神経外科で脳室ドレナージを行い軽快したが術中、外耳道内に化学繊維性異物を認めた。

### 【参考文献】

Martin Durisin, et al : Otogenic cerebellar abscess due to purulent labyrinthitis and defect of the superior semicircular canal and its propagation through the endolymphatic sac : Eur Arch Otorhinolaryngol 2007 : 264 ; 955-58

## 2. 再発性多発軟骨炎の一例

○宗 謙次・渡邊 毅・岩永 哲・田中藤信（長崎医療）  
宮下賜一郎・角川智之・中島章太（同内科）  
伊東正博（同病理）

再発性多発軟骨炎は、軟骨組織の炎症と破壊により多彩な症状を示す全身性疾患である。今回我々は、ポリープ様声帯の術後に再発性多発軟骨炎の診断に至った症例を経験したので報告する。症例は70歳女性。労作時呼吸困難感を主訴に当科受診。ポリープ様声帯を認めLMSを施行したが、覚醒抜管後に呼吸困難を来し緊急気切を施行。その際に気管軟骨を生検し診断に至った。現在気切孔は閉鎖し、ステロイド導入を行っている。

### 【参考文献】

茂木英明、他：再発性多発軟骨炎と思われた2症例：耳鼻臨床 2002；S109；98-101  
Damiani JM, Levine HL : Relapsing polychondritis - report of ten cases. :  
Laryngoscope 1979 : 89 ; 929-46

### 3. 季節性アレルギー性鼻炎患者の内服治療、局所点鼻治療に関する患者意識調査

○高崎賢治（長崎大）江夏 薫（長崎原爆）  
江上徹也・重野浩一郎・高村博光・道津 充（長崎市）  
山崎恵三（佐世保市）吉見龍一郎・宮崎 充（西彼長与）  
高橋晴雄（長崎大）

はじめに：2009年1月から5月に季節性アレルギー性鼻炎患者を対象に、内服薬、点鼻薬に対する患者意識調査を行った。

結果：今回行った第二世代抗ヒスタミン薬を中心とした治療は、内服コンプライアンス、治療満足度とも高値をしめした。また内服薬単独、点鼻薬単独治療に関しては、多くの患者が内服薬単独による治療を希望した。点鼻薬治療回数希望に関しては、1日当たりの使用回数は様々であった。

#### 【参考文献】

大久保公裕：【アレルギー疾患開発中治療薬の現状】耳鼻科 アレルギー性鼻炎の新しい治療薬開発の現状 日本未承認の新しい鼻噴霧用ステロイド薬について：アレルギー・免疫 2008：15；350-7

尾崎真一、内野順治、川崎雅之：気管支喘息治療患者における服薬コンプライアンスについて 外来アンケート調査より：Prog Med 2001：21；1767-76

#### 4. 呼吸困難を初発症状とした再発性多発性軟骨炎の1例

○前田耕太郎・坂口功一・原 稔・陣内進也・高野 篤・石丸幸太朗・金子賢一・高橋晴雄（長崎大）

再発性多発性軟骨炎（relapsing polychondritis、以下 RP）は、全身の軟骨及び軟骨と共通の器質を有する組織を侵す慢性・再燃性の比較的稀な疾患である。今回我々は、71歳女性で両声帯麻痺、主気管軟骨の壊死と変形のため呼吸困難を来たした症例を経験し、気管軟骨炎の存在と軟骨生検から RP と診断した。RP と診断された患者のうち気道病変を来すのは約 21%で、その内約半数で呼吸困難を初発症状とするとの報告があり、耳鼻科医が初診医となる可能性があるため鑑別疾患として知っておくべき疾患である。

#### 【参考文献】

野口雄五、他：再発性多発性軟骨炎：JOHNS 2005：21；1351-55

Armen E：Relapsing Polychondritis and Airway Involvement：CHEST 2009：135；1024-30



## 5. 当科における口腔・咽頭癌切除面に対するPGAシートおよびフィブリン糊スプレー被覆法の経験

○渡邊 毅・宗 謙次・岩永 哲・田中藤信（長崎医療）

早期の口腔・咽頭癌に対する粘膜部分切除は後遺症も少なく治療も短期間であり有効な治療法である。しかし露出した創面は疼痛が持続し術後出血の可能性もある。一次縫縮では機能障害や疼痛、人工真皮(テルダーミス®)では創部へのタイオーバーを必要とする。今回われわれは口腔・咽頭癌切除面にPGAシート・フィブリン糊スプレー被覆法を4例に行い疼痛の軽減などの有用性を確認した。その使用経験について報告する。

### 【参考文献】

徳島 武、他：呼吸器外科手術における新しい肺瘻閉鎖法の臨床的検討－PGAフェルトと擦り込みスプレー併用法－：日呼外会誌 2005：19；798-803  
小林省吾、他：PGAフェルトを併用した肝切離面フィブリン・シーリング法の検討：外科治療 2009：100；415-20

## 6. 鼻腔神経内分泌小細胞癌の1例

○山口仁平・眞田文明・畑地憲輔（長崎市民）  
入江準二・安倍邦子（同病理診断科）

頭頸部領域の神経内分泌小細胞癌は、比較的まれで、鼻副鼻腔の報告例は少ない。確定診断が困難で、悪性度が高く、その治療法は確立されていない。今回われわれは、腫瘍随伴症状としてSIADHを伴った鼻腔神経内分泌小細胞癌を経験した。症例は84歳男性。頸部腫瘍、鼻出血を主訴に来院し、鼻内に腫瘍性病変を認めた。診断後、肺小細胞癌に準じた化学放射線療法を行った。本症例の経過、治療に関して若干の文献的考察を加え報告する。

### 【参考文献】

山本理恵子、細川誠二、大和谷 崇、森田 祥、岡村 純、他：頭頸部神経内分泌小細胞癌8症例の臨床病理学的検討：日耳鼻 2008：111；517-22  
E babin, V Rouleau, PO Vedrine, B Toussaint, D de Raucourt MD, et al: Small cell neuroendocrine carcinoma of the nasal cavity and paranasal sinuses : J Laryngol Otol 2006 : 120 ; 289-97

## 7. 頭頸部腫瘍に対する Mohs 軟膏の使用経験

○北岡杏子・西 秀昭・奥 竜太・安達朝幸（佐世保総合）  
池原 進・横山洋子・武石恵美子（同皮膚科）

頭頸部進行癌で皮膚浸潤、特に自壊を伴う症例では、出血、疼痛、感染などを伴うことが多く、QOL を著しく低下させることが多いが、一方で有効な手段があまりないのが現状である。Mohs 軟膏とは主に皮膚科領域で腫瘍性病変を化学的に固定するために用いられてきたもので、前述のような症状を緩和する目的で使用された報告も散見される。今回我々は、この Mohs 軟膏を使用し、有効であった症例を経験したので報告する。

### 【参考文献】

南 和彦、長谷川直子、福岡 修、宮島千枝、角田玲子、深谷 卓：Mohs 軟膏を用いた頭頸部腫瘍の出血、疼痛制御：日耳鼻 2009；112；551-53

## 8. 家族性両側頸動脈小体腫瘍の1例

○岩永 哲・宗 謙次・渡邊 毅・田中藤信（長崎医療）  
伊東正博（同病理）  
山口仁平（長崎市民）  
小室 哲（長崎市）

頸動脈小体腫瘍は血流が豊富かつ周囲脳神経や頸動脈壁への浸潤を認めることがあり、手術難易度が高く術後合併症も少なくない。今回、われわれは家族性両側性症例を経験した。症例は30歳、女性。両側上頸部腫脹に対し消炎治療で改善無く、確定診断の生検目的に当科紹介。画像及び家族歴より頸動脈小体腫瘍と判断した。頸動脈と癒着の強い右側手術を先行し、半年後に腫瘍が小さな左側手術を行った。現在経過良好である。

### 【参考文献】

富田俊樹、他：頸動脈腫瘍に対する集学的アプローチ—自験例5例の診断と治療—：日耳鼻 2007；110；743-51

## 同門会学術奨励賞受賞論文講演 村田明子

演題名 : Amplitude and area ratios of summing potential/action potential (SP/AP) in Meniere's disease.

雑誌名 : Acta Otolaryngol. 2009 : 129 ; 25-29

### 英文抄録

Objectives: Recent studies suggest that summing potential/action potential (SP/AP) area curve ratio was more sensitive to endolymphatic hydrops in comparison with SP/AP amplitude ratio in extratympanic electrocochleography (ECoChG). The purpose of the present study was to evaluate the utility of the SP/AP area curve ratio in transtympanic ECoChG for the diagnosis of Meniere's disease (MD).

Patients and Methods: A retrospective chart review of 198 patients (209 ears) was conducted in cases of MD.

Results: With regard to SP/AP amplitude ratio, 57.1% in definite cases of MD (group 1), 39.6% in probable cases of MD (group 2), and 50.0% in the cases who had transformed from probable MD to definite MD (group 3) showed abnormally high values, respectively. Abnormally high values were observed in 43.9%, 27.7%, and 30.0% in SP/AP area ratio in groups 1, 2 and 3, respectively, indicating that abnormal values were observed more frequently in the amplitude ratio than in the area ratio in all three groups.

Conclusion: Our results suggest that SP/AP area ratio may not necessarily have higher sensitivity in the diagnosis of endolymphatic hydrops of MD than SP/AP amplitude ratio in transtympanic ECoChG.

### 和文抄録

目的 : メニエール病確実例において真に SP/AP 面積比が電位比より有意な陽性率を示すかを検討した。

方法 : 1982-1996 年の 15 年間に蝸電図検査を実施した中で、経過が追えた 198 例 209 耳の SP/AP 面積比と電位比を比較した。正常コントロールは 16 例で、症例は 3 群に分け、確実例をグループ 1、疑い例をグループ 2、疑い例から確実例へ移行した例をグループ 3 とした。

結果 : SP/AP 振幅比の上昇が、グループ 1 ; 57.1% (98 耳中 56 耳)、グループ 2 ; 39.6% (101 耳中 40 耳)、グループ 3 ; 50.0% (10 耳中 5 耳) にみられ、面積比ではグループ 1 ; 43.9% (98 耳中 43 耳)、グループ 2 ; 27.7% (101 耳中 28 耳)、グループ 3 ; 30.0% (10 耳中 3 耳) に上昇がみられた。グループ 3 の振幅比のみが面積比より有意な上昇を認め、他は有意な差は認めなかった。

結語 : SP/AP 面積比の真の意義を熟考すると共に臨床応用に関しても慎重であるべきと思われた。